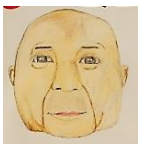
第 5 号

誠風中だより



令和６年５月 24 日
泉大津市立誠風中学校
校　長　　向井　説行

10 年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方（著）大空小学校初代校長 木村泰子 より引用

１０ 年後の社会を生き抜くために必要な４つの力とは①
「人を大切にする力」「自分の考えを持つ力」「自分を表現する力」「チャレンジする力」

正解のない時代、「親の言うことを聞く子」は危ない

先生の言うことを聞いていたら安全、などという神話は、東日本大震災の大川小学校の悲劇を見ても分かるように、見事に崩れました。想定外の中で子どもがどう生きるか。子どもに「ああしろ、こうしろ」と指示命令をして、親の言うことを聞く子どもをつくっていたら、子どもは自分の命も隣の人の命も守れない大人になってしまうのでは、という危機感からスタートしなくてはいけないと感じています。

子どもに「人を大切にする力」つけたかったら親が正解を言わないことです。それは同時に、正解がないからこそ、問い続ける必要があるということです。この正解のない問いを問い続ける力は、10 年後の社会で生きて働く力になります。正解があると、問わなくなるでしょう？まずは大人である親が、常に「これでいいかな？」と自分に問い続けてみて下さい。簡単ですよ。問い続ける子どもをつくるのも簡単です。**「あんた、どう思う」と聞くだけでいいのです。**

大人の思っている正解は正解と違います。たかが一人の大人の経験値で、未来のことなんてわからない。１分先のことさえ分からないし、地球が潰れるかもしれない。正解が通用しない社会に出くわしたら、子どもは前に進めません。ついでに言うと、大人が正解を持っているのに正解を言わない努力をしているのもアウト！大人は、自分の過去の経験値や成功体験をしているだけ。「言わないだけで、やっぱり正解持っているやん」っていう時点でアウトです。**“正解を問い続ける力”が 10 年後の社会を生き抜く「見えない学力」なんです。**

親自身も案外、「これって正解じゃないよね」と気づくことがありますよね。たとえば、**横並び主義や同調圧力、偏差値至上主義、人に迷惑をかけない**、などなど。子どもが生きづらくなるから、つい、「こうしなさい」と言いたくなる気持ちもわかります。私もそんな親でしたから。でも、**親の自分も「ああ、そうか」と気づいて自分を変えていく。この正解を問い続ける親としての自分を変えていく覚悟は、お金も要らない。他者の力も要らない、自分だけでできること。この覚悟は、子どもを大きく変えていきます。**

「言うことを聞かせる」をやめて、「聞く」「受け止める」

子どもに言うことを聞かせようとしている親御さんは多いでしょう。言うことを聞かせようとするから子どもは納得せず、そっぽを向くんです。反対に、言うことを聞かせようとすることをやめると、子どもは「ねぇねぇ」と勝手に寄ってきます。どういうことかというと、**子どもが何を言っても口をはさまず、とにかく子どもの言うことを、「聞く」「受け止める」こと。**これ、本当ですから、ぜひ家庭でやってみて下さい。

自分の言うことを聞いてくれそうだと思ったら、子どもが大人に寄ってくるのは当たり前なんです。たとえば、「今日、学校でＡちゃんが暴れて大変だった。何とかして！」と言ってきたら、まず、「ああ、そうなんだ」と受けとめる。「そうなんだ」といちどうけとめただけで、「おお、聞いてくれた」と子どもは思います。